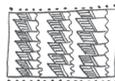


## 津村記久子著 『水車小屋のネネ』

(毎日新聞出版)



芥川賞作家、津村記久子の長編小説。昨年読んだ小説のなかでいちばん好きな小説だ。

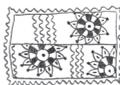
『水車小屋のネネ』の〈ネネ〉は、ヨウムという種類の鳥である。ヨウムはにんげんの言葉を話し、五十年以上も生きるらしい。この鳥がいる町に、身勝手な親から逃れてきた十八歳と八歳の姉妹が移り住み、人々に見守られながら自立して生きてゆく。その四十年間の物語である。

読者を引きつけるための個性が強い人物や、泣かせようとする大袈裟な展開など無く、磨いてきた筆力で丁寧に書かれた小説、という印象。私は小説を書いたことはないが、どこかにいそうな人々と、現実を起こりそうな事象を、こんな先に楽しみでどんどん読み進めたくなるような小説にするのは、とても難しいのではないかと感じた。今まで読んだことのない、静かに凄い小説だと思う。

読後も、しばらくそばに置いて、再び読み味わいたくなり、登場人物たちが、私の心に長くいる。本屋大賞二位。谷崎潤一郎賞を受賞している。

(斉藤倫子)

## 映画「アイアンクロー」



アイアンクロー(鉄の爪)はプロレスラー、フォン・エリックの必殺技であり、後にエリック・ファミリーの代名詞となった。この映画は実話が元になっている。

引退したフォン・エリックは4人の息子たちに、肉体の鍛錬と家族の結束を強いる。息子たちの肉体は極限まで鍛えあげられ、肩から胸、腹、太ももの筋肉は割れ、貧弱な身体の人などは見ているだけで正直怯んだ。でも一方で、父親にあまりに従順な息子たちに疑問を感じてもいた。なぜ反抗しないのだ、なぜそんなに素直なのだ。

弟のケリーが心の苦しみに耐えかねて自ら命を絶つたとき、長兄のケビンが生まれて初めて父に殴りかかる。あんたがケリーを殺したんだと。俺たちに生き方を強制しなければケリーだけでなくデビッドもマイクも死ぬことはなかったはずだ、そう言っているように感じられた。

ケビンは後に引退して晩年はプロレス業界から完全に足を洗ったという。若くして先に逝った愛する弟たちのことを、どんなふうに思い出していたらどうか。(辻 幾則)